

演題名：豚抗酸菌症の病変分布における病理学的考察

発表者名：○津田彩子 仁平真由美 大場三緒子 森河隆史

発表者所属：中央食肉衛生検査所

1. はじめに

豚抗酸菌症は、近年全国のと畜場で全身性病変の発生の増加が認められるようになり、平成 11 年の全食協病理部会の「豚の抗酸菌症判定基準」により敗血症(抗酸菌症)としての全部廃棄の検査基準が定められた。当所でも平成 15 年度の集団発生に伴い病理部会の基準に準じた検査基準を定め、特に肝臓について病変の形状から、抗酸菌症特有の乾酪壊死を中心とした肉芽腫病変(以下、結節型)と乾酪壊死を形成せずシート状に浸潤する肉芽腫病変(以下、浸潤型)に分類した。以後約 6 年間の抗酸菌症病変の分布状況について、感染経路を病理学的に考察する上で若干の知見を得たのでその概要を報告する。

2. 材料および方法

- (1)平成 15 年 4 月から平成 20 年 12 月までに当所管内と畜場で、敗血症(抗酸菌)で全部廃棄になった豚 439 頭(23 農家)の肝臓(結節型 289 検体、浸潤型 150 検体)、肺、脾臓および付属リンパ節(以下、肝 Ly、肺 Ly、脾 Ly)、躯幹 Ly(鼠径、浅頸 Ly)を肉眼的、組織学的に病変の有無、菌の有無、タイプ別の病変分布について比較検討した。
- (2)平成 19 年 7 月から 9 月および平成 20 年 12 月の計 2 回、腸間膜リンパ節(以下、腸 Ly)に乾酪壊死病変が見られ、肝臓に特有の病変の見られなかった豚の肺 Ly 各 100 検体について、肉眼的に病変の有無を調査した。

3. 結果

- (1)肝臓、腸 Ly、肝 Ly 以外の一箇所に病変があり、全部廃棄した検体は、浸潤型では 2.7% (4/150)、結節型では 42.6% (123/289)で、そのうち肺 Ly 一箇所で病変を確認したのは 72.4% (89/123)であった。病変を二箇所以上で確認したのは結節型で 57.4% (166/289)、浸潤型で 97.3% (146/150)であった。肝 Ly に病変がなく肺 Ly に病変がある検体は、結節型では 47.4% (137/289)、浸潤型では 4.0% (6/150)であった。また、平成 19 年度以降の全部廃棄は全て結節型であり、同一農家出荷豚であった。
- (2)肺 Ly に乾酪結節病変を形成したのは、一回目の調査では 8.0% (8/100)、二回目の調査では 44.0% (44/100)であった。

4. 考察およびまとめ

浸潤型は腸 Ly、肝臓、肝 Ly を含む全身性多発性病巣を形成することがほとんどであるのに対し、結節型では肝臓・腸 Ly を除き一箇所しか病変を形成しない傾向にあった。多発性病巣を形成するかは各臓器の病変の形成しやすさや個体免疫力の差であると云われてきた。しかし、結節型では肝臓・腸 Ly のほか肺 Ly 一箇所に病変を形成することが多く、下顎 Ly は以前から肝臓の病変の有無に関わらず病変を形成すると云われているが、肺 Ly もこれと同様であることが今回みられた。このことから、肝臓、門脈を経ない肺 Ly への感染経路として経気道による局所感染の可能性が強く示唆された。